

# 平成29年告示幼稚園教育要領における資質・能力に関する一考察

## — 造形表現活動を中心に —

A study of competencies and knowledge in the Course of study for Kindergarten notified in 2017:  
Focusing on Art Expression

荻原忠彦  
Tadahiko OGIWARA

### 【要旨】

近年の加速度的な社会様相の変化に対応して、中央教育審議会答申や平成29年告示幼稚園教育要領では、幼児教育において育みたい資質・能力が三つの柱に整理され、「主体的・対話的で深い学び」といったアクティブ・ラーニングの視点が加えられている。本論文では、幼稚園教育要領に記載されている資質・能力を取り上げ、過去に行われた造形表現活動を三つの柱やアクティブ・ラーニングの視点に対応させて考察を加えた。三つの柱の視点からみた資質・能力がアクティブ・ラーニングを通して総合的に育まれるために、幼児教育者の活動に対する検討・調整といったデザイン的な配慮の必要性に着目し論じた。

キーワード：幼稚園教育要領 資質・能力 造形表現

### I. はじめに

平成28年12月に中央教育審議会は、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（以下、平成28年版中教審答申とする）を答申している。この答申では、新しい時代に必要となる資質・能力の三つの柱やアクティブ・ラーニングの視点から「主体的・対話的で深い学び」の実現について等が示されている（中央教育審議会、2016）。

その後、平成29年に幼稚園教育要領（以下、新幼稚園教育要領とする）が文部科学省より告示されているが、平成20年告示の幼稚園教育要領とこの新幼稚園教育要領を比較すると様々な変更点が見られる。章立てからであるが、新幼稚園教育要領では、前文、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、特別な配慮を必要とする幼児への指導、幼稚園運営上の留意事項が加えられている。また、「指導計画の作成に当たっての留意事項」が「指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価」へと章立ての上からも変更が見られる（文部科学省、2008, 2017）。

近年、このような中央教育審議会答申の動向や幼稚園教育要領の変更点が見られるが、本論文は、これらの中央教育審議会答申の動向や幼稚園教育要領の変更点より、今後幼児教育において育成が

— 48 —

このように整理されている三つの柱は、新幼稚園教育要領では、

- (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

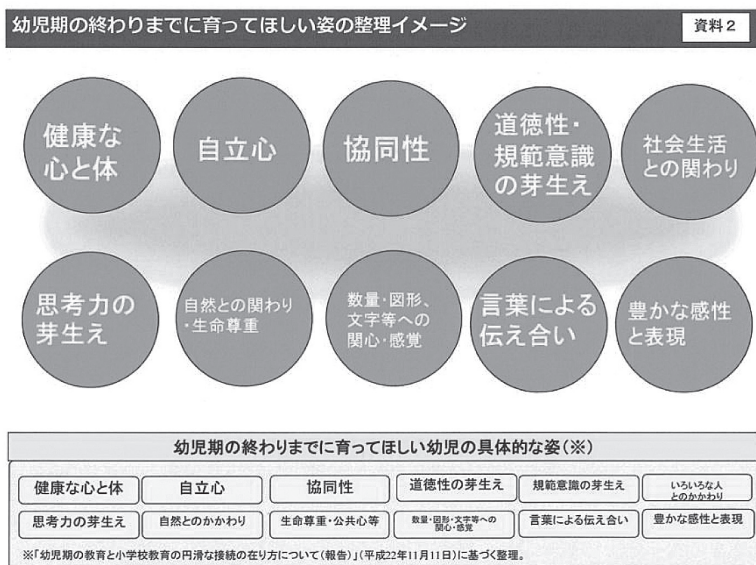
と記述されている（文部科学省, 2017）。

無藤（2018）は、これらの三つの柱について、「実際の指導場面においては、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」を個別に取り出して指導するのではなく、遊びを通した総合的な指導の中で一体的に育むよう努めることが重要」とし、図1にも示されている「遊びを通しての総合的な指導」の重要性を説いている。

## 2. 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

前節でみたように、幼児教育において育みたい資質・能力は三つの柱に整理されているが、これらの資質・能力をどのような時期に、どれくらい育成させていけばよいのであろうか。図2は、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の整理イメージである（文部科学省 幼児教育部会, 2016）。

図2 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の整理イメージ



文部科学省 幼児教育部会（2016）.「幼児教育部会における審議の取りまとめについて（報告）」

これらの「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、無藤（2018）は、この時期に育まれる資質・能力について「乳児から18歳までの人生の最初の教育で形成される力の核であり、その後の大人としての人生での学びを規定し続ける」ととらえ、幼稚園修了時の頃には「幼児期の終わ

りまでに育ってほしい姿」として現れることを指摘している。

無藤（2018）が指摘するように「人生の最初の教育で形成される力の核」であり、しかも「その後の大人としての人生での学びを規定し続ける」のであれば、その後の人生も左右しかねない重要な要素であり、この時期に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」がみられるように資質・能力を育成することが望まれる。

さらに、新幼稚園教育要領によれば、「資質・能力は、第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体によって育むもの」とされ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、「第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものである」と記述されている（文部科学省, 2017）。ここからすれば、活動全体を通して資質・能力が育まれ、幼稚園修了時には幼児期の終わりまでに育ってほしい具体的な姿がみられるよう、教師が実際に指導を行う際に考慮する性質のものであるととらえられる。

### 3. アクティブ・ラーニングの視点

前節でみた幼稚園修了時に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」がみられるように教師が考慮する際、どのような点を考慮すればよいのであろうか。

新幼稚園教育要領では、「第1章 総則」、「第4 指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価」、「3 指導計画の作成上の留意点」に「（2）幼児が様々な人やものとの関わりを通して、多様な体験をし、心身の調和のとれた発達を促すようにしていくこと。その際、幼児の発達に即して主体的・対話的で深い学びが実現するようにするとともに、心を動かされる体験が次の活動を生み出すことを考慮し、一つ一つの体験が相互に結び付き、幼稚園生活を充実するようにすること」と記述されている（文部科学省, 2017）。

ここにみられるような「主体的・対話的で深い学び」の実現について、平成28年中教審答申では「幼児教育における重要な学習としての遊びは、環境の中で様々な形態により行われており、（中略）アクティブ・ラーニングの視点から、絶えず指導の改善を図っていく」必要があるとして次の三点を挙げている。

（「主体的な学び」の視点）

- ・周囲の環境に興味や関心を持って積極的に働き掛け、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って、期待を持ちながら、次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

（「対話的な学び」の視点）

- ・他者との関わりを深める中で、自分の思いや考えを表現し、伝え合ったり、考えを出し合ったり、協力したりして自らの考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

（「深い学び」の視点）

- ・直接的・具体的な体験の中で、「見方・考え方」を働かせて対象と関わって心を動かし、幼児なりのやり方やペースで試行錯誤を繰り返し、生活を意味あるものとして捉える「深い学び」が実現できているか。

といった視点である（中央教育審議会, 2016）。

ここに示されているように、これらの視点は、教師が絶えず指導の改善を図っていくための視点であると考えられるが、前節でみたように「人生の最初の教育で形成される力の核」の育成や資質・能力の具体的な姿である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」がみられるように、絶えず指導の改善を図っていくのであれば、実際の活動ではどのような配慮点を持ち、指導の改善を図っていけばよいのであろうか。

### Ⅲ. 三つの柱からの分類と考察

#### 1. 活動例より三つの柱からの分類

本吉（1979）は、『私の生活保育論』において「本箱づくり」（p.162～p.167）の実践活動を報告している。本文の報告は長いため以下に要約する。

本屋さんがボロボロのダンボール箱に絵本を多数入れて園に届けてくれたが、箱がボロボロなので、本箱を作ることになる。八百屋の光信君の家に様々な大きさのダンボール箱をもらいにいったが、「みかん」「玉ねぎ」と書かれているので、絵の具を使ってダンボール箱を塗り始める。塗っても塗っても文字は消えないので、紙を貼ることになり、糊を作り始める。様々な方法で糊の作り方を試し、全員が糊を作れるようになる。ダンボール箱に糊を使って新聞紙を貼り、乾かしている段階で鼠に食べられてしまう。どうして鼠に食べられたかみんなで考える。その後、カビについて学んだり、紙の上に布を貼る方がきれいだと気付き、アイロンかけについて知ったりする。約三週間後に十数個の美しいダンボール箱の本箱を完成させる。

といった活動であるが、この活動例をもとに、筆者は前節で述べた三つの柱に対応させた視点より活動の発話や様子を分類し、表にまとめた（表1）。

表1 本吉園子による「本箱づくり」の活動を三つの柱の視点から分類

| 三つの柱 | 知識・技能の基礎                                          | 思考力、判断力、表現力等の基礎         | 学びに向かう力・人間性等            | 支援等             |
|------|---------------------------------------------------|-------------------------|-------------------------|-----------------|
| 場 面  | 本屋さんがボロボロのダンボール箱に絵本をいっぱい入れて届ける。                   |                         |                         |                 |
|      | 「うわあーこんなにいっぱい」<br>「はくの家にある本と同じだ」<br>「先生、読んでもいいの？」 |                         |                         |                 |
|      | 和彦「うわあーこんなにいっぱい、うれしいな。だけどきれいな本にボロッチイ箱」            |                         |                         | すかさずそこで「どうしよう？」 |
|      |                                                   | 本箱つくろうよ<br>「そうだ、本箱つくろう」 | 「光信君の家に（ダンボールをもらいに）行こう」 |                 |
| 場 面  | 子どもたちは、好みに合った形も大きさも色も多彩な箱を選んで持って帰る。               |                         |                         |                 |



|     |                                                     |                                                                               |                      |                                                           |
|-----|-----------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------|----------------------|-----------------------------------------------------------|
|     |                                                     | 箱の中に本を入れ始める。                                                                  |                      | 箱に、みかん、玉ねぎなどと大きく太々と書かれているので、「みかんの本だ」「玉ねぎの本みたい」と冷やかすように言う。 |
|     |                                                     | 絵の具を持ってきて、箱を塗り始める。(塗っても塗っても文字は消えない)                                           |                      |                                                           |
|     |                                                     | 「そうだ紙を貼ろう」                                                                    | 紙を貼り始める。             | 「この糊は高いからこの箱全部に紙を貼るのに使おうと困るんだけど、どうしよう?」                   |
|     |                                                     | 稔「僕のパパはもうせん牛乳で糊を作ったよ」                                                         |                      |                                                           |
|     |                                                     |                                                                               | 「それはいい」<br>「先生牛乳ある?」 | 「あるわよ」電気ヒーターと鍋を出してあげる。                                    |
| 場 面 | 子どもたちは、稔に言われた通り牛乳を煮て糊をつくり始めるが、三十分たっても四十分たっても糊はできない。 |                                                                               |                      |                                                           |
|     |                                                     | 「おい稔、お前ちの牛乳は何牛乳?」<br>「雪印」                                                     |                      |                                                           |
|     |                                                     | 「先生、保育園のは?」                                                                   |                      | 「明治よ」                                                     |
|     |                                                     | 「だからできないんだ」                                                                   |                      |                                                           |
| 場 面 | 皆で雪印牛乳を買いに行くことになる。翌日、雪印牛乳を煮たが牛乳がこげてもまだ糊はできない。       |                                                                               |                      |                                                           |
|     |                                                     | あの白いものは牛乳ではなくてお米のとき汁ではないか、石灰ではないのかななどいろいろな意見が出る。                              |                      | 何を煮れば糊ができるか、うちの人に聞いてくることにする。                              |
|     |                                                     | とうとう粉をふるいにかけて、水をよくかき混ぜて牛乳みたいにツブツブがなくなったら火にかけ、水をたくさん入れないとすぐ固くなって焦げてしまうなどを発見する。 |                      |                                                           |
|     | なめらかな糊を組全員が<br>つくれるようになる。                           |                                                                               |                      |                                                           |
| 場 面 | ダンボールの箱に紙を貼る仕事に移る。                                  |                                                                               |                      |                                                           |
|     |                                                     |                                                                               |                      | 新聞紙を貼ってから、その上に模様をつけるようにする。                                |
| 場 面 | 下貼りの新聞紙が貼られ、保育室に並べて乾かす。                             |                                                                               |                      |                                                           |
|     | (翌日)「あっ、箱がボロボロになっているよ!」<br>「きっと、鼠だ!」                | 「うわあ、すげえや、箱、おいしいのかなあ」<br>「ばかあ、箱がおいしいわけじゃないか」<br>「どうして箱が食べられたのかなあ?」            |                      |                                                           |
|     |                                                     | 「てんぷらだからだ」<br>「ばっか、箱が、てんぷらになるわけじゃないか」<br>「鼠は、糊が好きなんだよ、きっと」<br>「そうかなあ」         |                      |                                                           |

|  |                                              |                                                                                  |  |                                                                                                                           |
|--|----------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------|--|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|  |                                              | 「じゃがいもや、さつまいもなら食べるけど、糊なんか食べるわけないよ」<br>「糊なんか食べないよ」                                |  |                                                                                                                           |
|  |                                              | 「りんごの匂いがするんだよ、だから、ほくのをかじったんだ」                                                    |  |                                                                                                                           |
|  |                                              | 「おれのも、じゃがいもの箱だったからな」<br>「でも、じゃがいもは匂いなんかないよ」<br>「えっ!、匂いするもん」                      |  |                                                                                                                           |
|  |                                              | 「私のも、みかんの箱だったから、かじられたんだ」                                                         |  | 「じゃあ、先生が、今日はこの糊で貼っておいてみよう」そう言って、小麦粉からつくった糊ではなく、市販の糊を使ってもう一箱のダンボールを貼るところを子どもたちに見せ、もう一個のダンボールには小麦粉の糊をベッタリつけて貼り、その日は帰ることになる。 |
|  | (翌日)「あつ、こっちは食べてない!」<br>「ほんとうだ!」              | 「こっちは、りんごの箱じゃなかったからだ」                                                            |  |                                                                                                                           |
|  |                                              | 「でもさ、私のは玉ねぎの箱だったけど、いっぱいかじってたよ」<br>「じゃあ、どうして買った糊で貼ったこの箱は、かじられなかったんだろう」<br>「へんだなあ」 |  |                                                                                                                           |
|  |                                              | 「わかった。糊が違うんだ。ほくたちのはちゃんと煮たから、食べたんだ。買ったのは煮てないんだ」                                   |  | そこで保育者は、買った糊も、煮てつくってあることを説明する。                                                                                            |
|  |                                              |                                                                                  |  | 「でもね。買った糊は防腐剤といって、糊がくさらないようにお薬が入っているのよ。このお薬は、なめたり食べたりすると、おなかが痛くなって、死んじゃうの。防腐剤というのは、とても強い薬なの」                              |
|  | 鼠も食べると死んじゃうの?                                |                                                                                  |  | 「そうよ」                                                                                                                     |
|  | 「私、この間、手をけがしている時、糊いじったらしみて痛かった。ほお剤(防腐剤)のせいだ」 |                                                                                  |  | 「そうよ」                                                                                                                     |

|    |                                                                                                                                                                                                                 |                                                               |  |                                                              |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------|--|--------------------------------------------------------------|
|    |                                                                                                                                                                                                                 | 「だから、こっちの箱は食べなかったんだ。ほくたちのつくった方は防腐剤が入っていないし、ちゃんと煮てあるから食べられるんだ」 |  | 「そうなの。小麦粉はてんぷらにしたり、ケーキもできるし、パンも小麦粉と水を混ぜて焼けばできるの。だから、なめても大丈夫」 |
|    |                                                                                                                                                                                                                 | 悟「赤ちゃん組の人は小麦粉を煮てつくった糊を使わせてあげればいいね。なめても死なないから。買った糊は危ない」        |  |                                                              |
| 場面 | その後糊にカビが生えてカビをあらためて取りあげて学んだり、紙の上に布を貼る方が丈夫できれいだということが気付き布を貼る前にアイロンかけをし、ナイロンが熱で溶けてしまったり、反対に厚地のウールはしわが伸びなくて水をつけてアイロンをかけることを知ったり、布貼りをしているうちに布地の模様を切り抜いてアップリケを楽しんだりしていきました。約三週間後に子どもたちはとうとう十数個の美しいダンボール箱の本箱を完成したのです。 |                                                               |  |                                                              |

本吉圓子『私の生活保育論』フレーベル館（1979）を基に筆者が作成

幼児の発話や様子等から表に分類したが、表では厳密に分けられない部分、あるいは複数にまたがった方がよい部分などがあると思われるので、大まかに分類を行った。なお、「本箱づくり」の一連の活動より、発話が記述されている糊づくりまでを分類の対象とした。

## 2. 三つの柱からの考察

表1を追ってみると、まず園児たちの興味津々として活動に取り組む様子が思い浮かぶ。本吉（1979）は、「自発的なつくりたい、やりたい気持ちから出発した活動は、同じ製作活動でも、活動は充実し活気に満ちたものになり、どんなに大変でも最後までがんばってやりとおす」ことを指摘しているが、この活動でも「きれいな本にボロッチイ箱」「どうしよう？」「本箱つくろうよ」等というやりとりから出発し、途中絵の具で色を塗っても文字は消えなかったり、牛乳を使って糊がうまくつくれなかったり等という問題を協同的に（支援も含まれるが）解決し、「約三週間後に子どもたちはとうとう十数個の美しいダンボール箱の本箱を完成」させるに至っている。

そして、三つの柱の視点から分類してみても「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」を個別に取り出して育成しているわけではなく、要所要所の勘所を得た支援によって、遊びを通して総合的に育成しているように思われる。

また、三つの柱の資質・能力の具体的な姿である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「豊かな感性と表現」が造形表現と関連が深いと思われるが、「豊かな感性」について平田（2010）は、感性とは「さまざまな感覚器官で身近なことを感じ、感じたことをもとに考えたり思ったりする、その考えや思いを具体的な行動に移す。つまり、「感じる」という入り口から、考えたり思うことを経て、「行動する」という出口までの一連の行為を「感性」という」として、造形表現における一連の行為の重要性を説いている。

造形表現では、いわゆる出口の表現の部分が重視されがちであるが、「豊かな感性」ということであれば、平田（2010）が説いているように「感じる」という入り口から、「行動する」という出口までの一連の行為を豊かにしていくことが望まれるものと思われる。「本箱づくり」の活動はそ



ういった点に配慮していたことで、出口の行為として表れたダンボール箱の本箱製作に向けての意欲が高まり、製作が進み、三つの柱の視点からの資質・能力が総合的に育成されていったものと考えられる。

### 3. アクティブ・ラーニングの視点からの考察

次に表1をアクティブ・ラーニングの視点から追ってみると、「光信君の家にダンボールをもらいに行く」「箱の中に本を入れ始める」「絵の具を持ってきて、箱を塗り始める」「紙を貼り始める」「糊をつくり始める」「皆で雪印牛乳を買いにいく」「箱がボロボロになったことについて話し合う」等といった主体的な活動が多くみられる。前節でみたように、「本箱作り」といった一連の行為を配慮しているため、このような活動が多くみられているものと思われる。

そして、発話を追ってみても対話的であり、対話により次の活動に向かう様子が現れている場面がみられる。順を追ってみると「本箱つくろうよ」「そうだ、本箱つくろう」「光信君の家に（ダンボールをもらいに）行こう」といった対話から、多彩な箱を選んで持って帰るという場面や「僕のパパはもうせん牛乳で糊をつくったよ」「それはいい」「先生牛乳ある？」といった対話から、糊をつくり始める場面、最初はうまく糊がつかれず、製造会社について「おい稔、お前んちの牛乳は何牛乳？」「雪印」「先生、保育園のは？」「明治よ」「だからできないんだ」と確かめ、皆で雪印牛乳を買いにいく場面、さらには、箱がボロボロになっていることに気付き、なぜ箱が鼠に食べられたか話し合い、匂いによって食べられたのか確かめるため条件を変えてみる場面、そして、箱と糊の条件を変えて確かめた結果から、防腐剤について知り、防腐剤が入っていない方が食べられていたり、赤ちゃん組の人には安全面から小麦粉で作った糊を使わせてあげればいいことに気付いたりする場面等である。

これらの発話や様子をみると、対話により次の活動に向かい、場面が変わっていくごとに、学びが深くなっていく様子もうかがえる。高山（2017）は、これからの時代には「自律性、行動力、多様性を尊重し立場や意見の違う人とも協働する力、柔軟な思考や発想、問題発見、解決力を育む」ことの必要性を指摘しているが、幼児教育の段階で、こういった能力の基礎的な部分を育成していくことは、これからの時代を生きる子どもたちにとって必要なことと思われる。

### 4. 過去の事例にみる現代性

平成28年版中教審答申では、今後育成が期待される資質・能力は「これまでの学校教育で育まれてきたものとは異なる全く新しい力ということではない。学校教育が長年その育成を目指してきた、変化の激しい社会を生きるために必要な力である「生きる力」や、その中でこれまでも重視されてきた知・徳・体の育成ということの意義を、加速度的に変化する社会の文脈の中で改めて捉え直し、しっかりと発揮できるようにしていくことである」と記述されている（中央教育審議会, 2016）。

本吉（1979）の「本箱づくり」の活動は、40年程前の活動である。この「本箱づくり」の活動に三つの柱の視点から、資質・能力の育成がみられるのであれば、今までもそのような視点から活動が行われてきた部分が多々あるように思われる。ここからすれば、新幼稚園教育要領の大きな特色として三つの柱やアクティブ・ラーニングの視点等が示されているが、何か新しいことをするとい

うより、こういった現代性を持った配慮に現代や今後の幼児教育者、保育者が気付く「加速度的に変化する社会の文脈の中で改めて捉え直し」、意図的に実践を行うことが重要なのではないだろうか。

広辞苑によれば、デザインとは「意匠設計。製品の材質・機能および美的造形性などの諸要素と、技術・生産・消費面からの各種の要求を検討・調整する統合的造形計画」である（2018）。幼児教育に置き換えてみれば、各種要求から支援の検討・調整をしていくことともとらえられる。今後の幼児教育においては、活動を通じたデザイン的な発想が必要であり、子どもの様子や活動の状況に応じて、活動を検討・調整し続けるといったことがより重要になってくるのではないだろうか。

#### IV. おわりに

II-1 節でみたように、近年の社会様相の変化は著しい。野村総合研究所（2015）は、「英オックスフォード大学のマイケル A. オズボーン准教授およびカール・ベネデクト・フレイ博士との共同研究により、国内601種類の職業について、それぞれ人工知能やロボット等で代替される確率を試算」している。その結果「10～20年後に、日本の労働人口の約49%が就いている職業において、それらに代替することが可能」と報告している。

このように近年の社会様相の変化は加速度的である。こういった社会様相の変化からすれば、「実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要」であると考えられる（中央教育審議会, 2014）。

そのため幼児教育においても三つの柱が整理され、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されているのであるが、とりわけ造形表現と関連した資質・能力の育成にあたっては、III-2 節、III-3 節でみたように、一連の行為やアクティブ・ラーニングを通じた活動への検討・調整といった配慮が今後、求められてくるものと思われる。

それは、幼児教育者、保育者の子どもの姿からのとらえや子どもが主体的・対話的に活動できるように深まった学びに対しての次の課題への検討・調整等であると考えられるが、幼児教育者、保育者が活動中の子どもの様子から気付いたり、状況に応じて活動の方向性を変えたりするといったいわば活動のデザインといったことが、今後より必要になってくるものと考えられる。

#### 引用・参考文献

- 新村出（編）（2018）『広辞苑第七版』 岩波書店 p.1997
- 高山静子（2017）『学びを支える保育環境づくり～幼稚園・保育園・認定こども園の環境構成～』 小学館 p.50
- 中央教育審議会（2005）「我が国の高等教育の将来像（答申）」（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335581.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335581.htm)）（2018年8月19日取得）
- 中央教育審議会（2014）「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm)）（2018年8月13日取

得)

中央教育審議会 (2016)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について（答申）」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm)) (2018年5月20日取得)

野村総合研究所 (2015)「日本の労働人口の49%が人工知能やロボット等で代替可能に～601種の職業ごとに、コンピューター技術による代替確率を試算～」株式会社野村総合研究所 p. 1 ([https://www.nri.com/~media/PDF/jp/news/2015/151202\\_1.pdf](https://www.nri.com/~media/PDF/jp/news/2015/151202_1.pdf)) (2018年8月13日取得)

平田智久 (2010)「保育の基本と保育内容」平田智久・小林紀子・砂上史子 (編)『保育内容「表現」』ミネルヴァ書房 p. 7

無藤隆 (編著) (2018)『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』東洋館出版社 pp.26-29

本吉圓子 (1979)『私の生活保育論』フレーベル館 pp.151-167

文部科学省 (2008)『幼稚園教育要領 (平成20年告示)』教育出版 p. 1

文部科学省 (2017)『幼稚園教育要領 (平成29年告示)』フレーベル館 pp. 2- 8

